


第三部

以前日本・韓国で
勤めた
オブレート会士



津田季穂

レオナルド・ロビタイ

ミッションというオペレート会の雑誌の1950年9月～12月の275号に、ロビタイ神父は次のように書いた。

日本のある處では、「日光を見ずに結構というなかれ」と。この有名な地域は東京から65キロぐらい北の方にあるが、そのように評判が高い。帝の国を訪れるなら、日光に行かなければ非常に心残りである。この町は素晴らしい山の風景に囲まれて、人気のある休暇の場所である。絵のような美しい自然だけではなく、多くの神社の彫像の著しく素晴らしい技巧のために知られている。確かに、日本を訪れる観光客は必ず日光を見るべきである。

こういう環境の中で、1899年11月23日に当地の医者の子息として、津田季穂は生まれたのである。津田夫妻は日光ではとても有名だった。教育のある、教養を有する富裕な日本の中流クラスの代表格だった。彼等に6人の子供が生まれた。季穂は5番目である。

彼は安定した家庭の保護的な配慮の中で、日本の伝統的な環境で育った。日本という社会では、特に家庭に関しては、何世紀もの昔からすべての側面で厳しく細かく決められていた。家の頭は明確な決まりと習慣に従って、家人の意見を聞いても聞かなくても、自分の息子や娘のことなら絶対の権力を持ち、決断を下すのである。これは子供のころから結婚相手を決めることまでである。

季穂は若い時に、東京の私立の学校に送られた。この時期は平穏な時期である。特別に何も無い。だが、17歳になった時に思わぬ事故に会い、それが自分の将来に大いに影響を及ぼした。

父親の助手をしていた同居人が嘔に行き、その帰りに、不注意にも季穂の方に向かって銃の引き金を引いた。良くあることだが、不幸なことに銃にはまだ玉が入っていた。そのために、季穂は右目に銃弾の玉を受けた。季穂は生き残ったが、目だけは完全に打ち砕かれたのである。

他の影響もあった。長いリハビリの後で非常に敏感な性格を持つ彼は、復学した時、情のない仲間にあわれたことが度々である。こういう思いやりのない環境に耐えられなくて、間もなく退学したのである。それに別の方面に興味を持っていた。長い月日のリハビリの間に、時間つぶしとして絵を描くようになっていた。しかも趣味になった。そして早くも美術の魅力に引かれて、その勉強をしようと決断した。日本美術アカデミーに願書を出した。その学校は開校したばかりで、日本の学生に西洋の美術を紹介していた。もちろん、家の反対はあった。なぜかという、当時日本では美術というものは社会的にはタブーであった。やっと条件付で許可をもらった。その条件は上記のアカデミーに合格することであった。簡単にその条件を果たした。5年間そこに通学し、一流の美術家になった。もう少しそちらで勉強しようと思ったが、その学校の創立者が亡くなった時に、学校の内紛で学校がつぶされた。しかし、学校として短い存在であったにも関わらず、当時の日本の美術界に多くの影響を及ぼした。美術家の中にその学校の卒業生は多い。

その後、季穂は良く描き、よく本を読んだのである。当時用のない時期だったので、ますます読書をする願望や、より高質な知識を得たいという渴望を満たす機会となった。それはキリスト教の信仰に導いてくれた。

彼にとって、読書の中で一番魅力的だったのはケーベル先生のものであった。ケーベルはカトリック信者で、当時東大の先生をしていた。ケーベルの書物はカトリックの教えを強く伝えて、美術家である季穂の心に訴えるものがあつた。これは彼が



60才

確かにカトリックの教えを受け入れた原因の一つである。

しかし、一番の原因は幼いイエスの聖テレジアの自伝である。これが彼を教会の門まで導いたのである。

この時点で、面白いしかも感心と呼ぶエピソードがある。このエピソードは本人の人格と美徳を理解するために大事である。フランス人の宣教師から普通のキリスト教の教義を習い始めていた彼・熱心な求道者は、師イエスの跡を辿る誠実な願望があることを証明するために、神からの特別な十字架を願った。間もなく、右脚に不思議な痛みを感じ始めた。そのうちその脚が動かなくなっ

た。手術や長いリハビリをしても良い結果は

なかった。ただ洗礼を受ける日を遅らせただけだった。ついに1943年7月18日に、44歳で東京にて津田季徳はカトリックの洗礼を受けた。幸いでめでたい日となった。というのは、その日に次のような決心をした。残りの一生を彼に残った唯一の道、つまり伝道士として身を捧げたい、という決断だった。

東京とその周辺で、ますます空襲が激しくなったので、都内は住める所ではなくなった。従って、津田氏は友人のいる四国の鳴門に移った。点々と徳島や高知にも滞在するが、必ず鳴門に戻る。そこで多くの改宗者が生じてくるので、独立した巡回教会になる。1950年に42人のカトリック信徒がいた。

1949年、オブレート会が四国に来るようになった時に、徳島の宣教師は有能な伝道士が必要となった。もう既に巡回教会で立派に努めていた津田氏に頼むのは当然だ。下宿の問題が解決され、津田氏は喜んで

徳島の伝道のために移住した。主任司祭の主任伝道士として努めた。(当時ロビタイ神父自身が主任司祭だった) こういうわけで、彼の優れた教え方を受けて、徳島周辺や鳴門周辺の広い範囲で人々が恵みを受けた。何年か前に脚が切断されていたにも関わらず、四方に信仰を伝える為に旅に出る。町でも田舎でも、キリストとその救いのメッセージを知りたい人は安心して学ぶことができた。

有能な伝道士は宣教師の右腕だ。しかも、その伝道士が同時に優雅でとても謙遜で忍耐強い分別のある、そして熱心で敬虔な人なら、宣教師は喜ばないでられない。徳島の主任司祭は神に感謝している。そして多くの信徒が増えていることは神の摂理の次に、この伝道士によることだ。

ヨゼフ津田季徳は修道士としてオブレート会に入った。1952年12月8日に、彼は修道士になるために修練期を始め、1959年の同じ日に、終生誓願を立てた。とても有意義な生涯を終えて、1981年7月23日に永遠の報いを受けた。



山々を巡って

ジェラード・スティーブンス



現在

私が日本に着いたのは、1956年9月19日でした。2年間の語学研修を終え、何回かの短い仕事の後、1962年9月1日に池田教会の助祭に任命されました。1964年9月20日、主任司祭だったシモンズ神父様が高知教会へ移られて、私が池田教会の主任司祭になり、1988年に中村教会に移る

までの間、2回、助祭が短期間いた以外は、私一人でした。

池田は四国山地の南方から北へ流れていた吉野川が東に流れをかえて徳島市へと向かう、その曲がり角にある、地方の町です。池田の地形は、川沿いの狭い谷間以外は、ほとんどが山ばかりで、池田教会の教区は、その山々すべてを含むとても広い教区でした。

私たちの伝道活動は、まず、あちこちの学校を訪問し、地域の人々のための英会話教室や子供会を作ることから始めました。私たちは、この活動で手一杯でしたが、それでも私は、教区の隅々まで訪れようと決めていました。時間が取れると、朝早いバスに乗って山奥の終点で降り、そこからキリスト教のビラをまきながら、歩き周り、最終のバスで帰ったりしていました。中村でも、ほぼ同様の活動をしていました。多分、少しゆっくりになったでしょうが。

私はデスクワークは得意ではないのですが、幾つかの学園で数年間教えたことがあります。教区の活動には直接関わりませんが、高知の聖母学園では、スペイン語を教えました。その後1975年から1984年まで善通寺の四国学院大学で、初めはフランス語、後にドイツ語とスペイン語を教えていましたが、1983年～1984年の学年末でやめました。

その後、司教様の御指示で、高松の南の綾南町に新しく出来たキリスト教共同体のお世話と、香南町にあるドミニコ会の親想修道女会（神の母マリア修道会）で御ミサを行うことになりました。1985年3月からは、司教とオブレート会管区長との話し合いによって、週の半分は綾南町に、もう半分は池田にいるようになりました。

この頃、池田教区では全く予想もしなかった新しい事が生じていました。池田には、1980年からフィリピン人女性の芸人たちが定期的に滞在していましたが、1987年には、日本人と結婚したフィリピン人のお嫁さんが6人、池田小教区のはずれの南の山地にやってきました。私は彼女たち

と役所の人達との間に立って、諸手続きなどのお手伝いをしました。どちらも相手の言葉がわからず、また、相手の習慣についての知識もありませんでしたから、通訳したり説明しなければならない事が沢山ありました。全てがうまく行ったお陰で、フィリピン人のお嫁さん達は私に感謝してくれましたし、信頼してくれるようになりました。それからさらに多くのフィリピン人女性が日本人と結婚して、教会の南から東まで教区のあちこちに住むようになりました。後に私が移った中村でも殆ど同じ状況で、私はまた、お手伝いすることが出来、彼女達もとても喜んでくれました。

編者 注

この後、スティーブンス神父様は、健康上の理由から中村教会に一人でおられる事が出来なくなり、もっと大きな共同体である赤岡教会に移られました。そこでも、まるで本当の父親のようにフィリピン人女性たちの世話をされました。神父様は、中村、赤岡、池田の顔見知りのフィリピン人女性達を度々訪問されましたし、また、新しく日本にやってきた女性達にも助言をし、助け、教え、彼女達のキリスト信者としての求めに応じて霊的に助けられました。しかし、1996年5月10日、神父様は突然亡くなりました。彼女達は深く悲しみ、今も心から神父様を偲んでいます。



キリストの御顔

ワード神父様のこと

赤岡教会信徒 武田 紀



今年も残り少なくなった今日、私達は教会墓地に行きました。聖心のイエス様の御像の下にオブレート会の神父様方のお墓が4基あります。右からワード神父様、ロビタイ神父様、ブラザー津田さん、そしてスティーブンス神父様と並んでいます。いつ訪れても、ここには美しい供花が絶えたことがありません。

最初にこの墓地に入られたのはワード神父様で、最近ではスティーブンス神父様です。ワード神父様の墓碑には、1975年9月4日48歳とあります。48歳。余りにも若くして召

されています。もしも御健在でしたら、今70歳です。いつも明るく若々しくユーモアに満ちた神父様のイメージからは、70歳の姿はとて想像出来ません。

私が神父様から貴重な指導や援助をいただいたのは、1968年5月、アメリカの首都ワシントンのオブレート会本部を訪問した時のことです。その時私はシモンズ師の手引きを受けながら、社会福祉の実態と研修の為、旅行をしていました。丁度休暇で帰米されていたワード神父様は心よく厚生省その他福祉施設の見学に、1日を費やして案内して下さいました。オブレート会の本部で休息しながら、私にとっては驚異的な迄に進歩したアメリカでの社会福祉の実態と専門的な福祉の在り方について、ワード神父様を通じて学び、目から沢山のウロコを落すことが出来ました。今も感謝しています。

かねてから神父様は彫塑、絵画にすばらしい特技をもたれ、その傑作は私達の憧れでした。そこで、勇気をだして神父様の記念に何か一つ欲しいとお願いしたら、或る日遠路わざわざ私方を訪ねて下さり、一枚の絵を下されたのです。それはペロニカの聖布に写されたキリストの面影、イエズス様のえもいわれぬ美しい御顔でした。苦悩に満ちた十字架の道行きにも関わらず、慈しみと許しに満ちたキリストの御顔でした。ワード神父様はこの絵を届けて下さったその足で、新しい任地古賀に行かれ、やがて手術の為アメリカに帰られました。そして全く突然に神のみもとに召されたのです。このことはまことに痛恨の極みです。

48歳、これからという時でした。私達にとって、福音宣教の実をもたらして下さる大事な大切な神父様でした。今では、この残された唯一のキリストの御顔が神父様の最後の作品、そして貴重な形見となってしまいました。眺めても眺めても尽きることのないキリストの愛の御顔、この絵の中に、私はワード神父様の大きな愛と命が伝わってくるのを覚えます。ワード神父様に感謝。神に感謝。

東京のオブレート会

パトリック・ヒーリー、米国軍カトリック司祭

私は、高校卒業の際、ボストン大司教区のマサチューセッツ聖ヨハネ神学校への奨学金の申し出を受けました。神が、宣教師になるように、と呼んでおられるのを感じましたので、志願して、汚れなきマリアの献身宣教会（オブレート会）に加わることを許されました。オブレート会での私の最初の院長は、ロバート・ギル神父でした。そして、ワシントン大神学校での最終学年時の院長も、ロバート・ギル神父でした。叙階に際し、私はブラジル宣教師団に志願しました。管区長には、他に考えがあったようで、私は、カトリック大学に戻って大学院での研究に励むと共に、教育の経験を積む事になりました。宣教師への私の情熱は衰える事はありませんでしたが、神学校の規律では、従順の美德と誓願に重きが置かれていたのです。学位の力を得て、私は、その後12年間教室で教え続けました。1959年に、レイモンド・ハント管区長より、私が日本宣教師団に任せられた、との話がありました。そして再び、日本での私の管区長は、ロバート・ギル神父でした。

私の日本滞在のハイライトは、練馬区のオブレート会神学校の建物の建設でした。ギル神父は、建物のレンガや板を全て、一つ一つ愛情を込めて、監督されました。献堂式には、総長も出席されました。また、イエズス会日本管区長のアルベ神父、オブレート会フィリピン管区長のジュイク・パーク神父、テキサスと沖縄からの陸軍司祭のエメット・ウォルシュ神父、そして、神学校の素晴らしい後援者の方々、皆が集まって、オブレート会士達と共にこの盛大な献堂式を祝いました。

日本のオブレート会神学校では、外国からの終身誓願後の神学生を日本宣教師団に受け入れる、という素晴らしい計画を立てました。神学生は、2年間の語学研修を終えた後、イエズス会の東京司教区大神学校で神学を学ぶことになっていました。アメリカ東管区とローマからの初めての神学生が来ました。ワシントンからは、ディック・ボナンそしてローマからはハーブ・ネルソンとレイ・ブルゴアンでした。ジーン・ブレンディヴィル神父とヤン・ヴァン・ホイドンク神父がまとめ役になり、私は院長でした。

語学研修の学生達は、東京の反対側の六本木にあるフランシスコ会の語学学校まで、毎日、長時間運転して行かなければなりません。彼等が夕方に戻ってくる頃には、疲れすぎていて、修行をきちんと行うことが難しいほどだったのです。この状

態が軽くなれば、彼等は語学は上達しても霊的な成長は望めなくなりそうでした。そこで、ギル神父の許しを得て、私は、オブレート会の語学学校をつくる事に着手しました。国際キリスト教大学を訪ねて語学部長と話し、資格を持った語学教師を派遣してもらうことにしました。さらに、アメリカのカトリック大学の事務局長であるロイ・デファラリ博士と連絡を取って、我々が、この名門の大学の提携校になれるようにしました。オブレート会語学学校での履修証明と終了証明が、認められるようになった

のです。神学校の地階を仕切って、教室をつくりました。ソニーの人達によって、語学LL教室もできました。まもなく、吉祥寺のノートルダム修道女たちが、そして、横田と立川の空軍基地からも学生達が入学してきました。私達は、教科を、日本史、日本文化、倫理、司教神学と増やし、学校は大成功をおさめました。我が校に在籍した陸軍兵の中でも多くのものが、米国の大学での学位取得の為に、我が校の履修証明を利用することができました。

私の6年の滞在期間は、1966年に終わりました。その年の12月に、6ヶ月間の休暇のために日本を離れたのですが、米国内に到着後間もなく、12000フィート上空での空中衝突に巻き込まれてしまったのです。宣教師についての話をするために、ボストンからニュージャージーに向かって飛んでいるところでした。

私達の飛行機は、TWA航空のジェット機と衝突して、コネチカット州ダンバリー近郊の農場に墜落しました。パイロット他、数名がその場で亡くなりました。数ヶ月間の療養の後、日本へ帰ろうとしていた矢先、私は、米軍大司教区より、軍に入るよう望まれました。そのときの管区長は、バット・ブレイディ神父で、寛大な許可をお与え下さいました。その後13年間、陸軍で、ヴェトナムやドイツ、韓国、日本では沖縄、座間のキャンプに滞在した後、私は、マイアミの聖ティモシ小教区の司祭になりました。今回は、アメリカ東管区に戻ったのです。私の日本の思い出は、創始者としてのギル神父とロビタイ神父の完全なる献身の記憶です。また、日本の友人の千恵子さんと照子さん姉妹の暖かさ、気遣い、優しさを、いつも懐かしく思い出さずして。彼女達のお陰で、神学校の生活は、心地よいものになりました。私が日本で過ごした日々は、私の50年の司祭生活の中でも最も幸せで、楽しい日々のひとつでした。ああ、そうでした、ギル神父は、フロリダ州マイアミの私の小教区で、1982年に亡くなりました。



ジョン・バーレット

ジャックの出身地は、マサチューセッツ州のウォータータウンです。1952年に叙階され、まもなく、オペレート会日本宣教師団に加わりました。彼は、アイディアマンでした。日本滞在中、彼は、キリスト教伝道の為に、様々なアイデアを考え出しては実行し続けたのですから。米国に帰国後は、転任したマサチューセッツ州ウースター司教区のテレビ・ラジオ・新聞報道支部に大変なエネルギーを注ぎ込みました。ジャックはまた、歌と話とで仲間宣教師達を楽しませてくれる、私達の共同体の良き働き手でした。現在、彼は、故郷の司教区司祭として、半引退の生活を送っています。



バーレット氏(右) バートン氏(左)

ニコラス・ネビル



ニック神父の出身地は、カナダのニューファンドランドです。後にボストンに移り、オペレート会神学校に入りました。1950年に叙階され、日本行きを志願、1951年に来日しました。ニックは、何事においても、とても熱心に働きました。彼の任地は、伊丹、新本町(現、江の口)、そして最後は福岡の光が丘でした。そして、1965年、理由はよくわかりませんが、アメリカ合衆国西部に転任後に亡くなりました。彼が亡くなったのは、1960年代後半のことでした。彼は、私達の共同体の良き働き手でありましたし、非常に惜しまれました。

ダニエル・ウォード



ダン神父は、米国海軍に所属していましたが、健康上の理由で除隊後、オペレート会米国東部管区に加わり、1954年に叙階されました。来日したのは、その翌年でした。彼の任地は、古賀、安芸、中島町、そして再び、古賀と、かわりました。この間、しばらく、徳島や東京にもいたことがあります。ダンは、芸術家で、才能豊かな方でした。人々に対する彼の態度に引きつけられて、何人かがキリスト教の勉強をするようになり、彼の手から洗礼を受けました。人気のある方でしたので、1975年の心臓手術の後、亡くなられた時には、多くの人々が悲しみました。彼の足跡は、彼の芸術的な作品や、彫像として、日本に残っています。



ティモシー・マルヴィー

ティム神父の出身地は、ニューヨークです。1940年にワシントン D.C.で叙階された後、日本行きを志願し、1949年に第二陣として来日しました。ティムは、大変に才能豊かな人物で、ルーズベルト大統領の死に関しての国会議事録原稿を書いたこともありますし、また、メリノール会主催の「心のともい」の有名なベイトン神父の下で、ナショナル・カトリック・アワーや家庭のロザリオ・プログラムの為に芝居を演じたりしていました。彼の日本滞在中に、駐韓国米軍が「彼等は、あなた方の息子たちです。("These are your sons.")」という本を書くと言うので、韓国に行くよう依頼された事もありました。この本は、たった一票の差で、「今月の本クラブ賞」を逃しました。ティムの日本語は、決して上手ではありませんでしたが、それにもかかわらず、伊丹小教区や古賀小教区では、本当に誰からも好かれていました。古賀教会の全施設建設の際には、彼の尽力によって、彼がゴースト・ライターをした事もあるニューヨークのフランシス・スベルマン枢機卿からも資金の援助をいただくことができました。日本に居た6年間、彼は沢山の楽しい思い出を残してくれました。



今は亡きマイヤー神父様のこと

私の手許に、故レオナルド山本邦男の死を間近にした数枚の貴重な写真があります。彼は孤児であり、天理教布教師の養子となり、6歳の時博愛園々児となり、2年間在籍しました。生後間もなくポリオにかかり、歩行が困難でした。他施設に転籍後、1963年の夏、突然博愛園を訪ねてきました。中学卒業後、紳士服仕立ての職親の元に住み込んでいました。博愛園での2年の間に、毎日曜日江ノ口教会のミサに行ったこと、オペレート会の外国人神父様の優しさにふれて、幼いながらも心のぬくもりを覚えたことなど、今でも忘れ難い思い出だと語っていました。

1964年4月、彼が大腸ガンに患い、余命いくばくもないことを聞き、私は病床にかけつけました。彼を取り囲む人々が病名を極秘にしていたのですが、私はありのままを彼に知らせました。一瞬大ショックを受けた彼が、しばらく沈黙したあと「先生、僕はキリストの天国に行きたい」と大きな声で叫びました。早速スティーブンス神父様、マイヤー神父様が訪ねて下さり、受洗の運びとなりました。二人の神父様とレジオの会の土屋さんを迎えて、体の衰弱消滅に反比して、一層信仰心を燃やし高めてゆきました。

彼は生命保険に加入していたので、死後の保険金の受け取りと葬儀について、養父・職親間に醜い争いが生前からもち上がっていました。私達は神父様の助言で一切の関わりを持ちませんでした。7月25日早朝、死の予告を医師から受けました。その数日前、マイヤー神父様がいつものようにユーモア一杯に

笑顔で死後のことを話された時、「邦男君、バラの花の雨を降らせてネ」「バラの花の雨？ どうして降らすことが出来るか？」「そうね、じゃ、そのうち私が行くから、二人で一緒にバラの花の雨を降らすうね」「うん、うれしい」こんな対話のあったことを思い出します。

病院での通夜は養父・職親各々の宗旨で行うことに決り、私達は教会で立派な葬儀ミサを行ないました。その時、とても不思議なことが起こりました。強硬にカトリックを拒絶していた人々が彼の葬儀の申し込みに来たのです。養父・職親その他大勢がミサに参列し、一同が平安に満たされ引き上げて行きました。宗旨の上から対立し嫌悪しあっていた雰囲気、平和の中に一致し神に感謝出来たことは、まことに不思議なことでした。これこそ天国からのバラの花だった、とマイヤー神父様と語りあったことでした。

その後間もなく、マイヤー神父様がアメリカに帰国されました。ところが、数年前マイヤー神父様御自身が神に召されたことを知り、私は絶句しました。その時の驚きと悲しみは言葉で表すことが出来ません。「どうやってバラの雨を降らすことが出来るか？」という邦男に「私もすぐ追っかけてゆくよ。その時天国から二人で一緒にバラの雨を降らすうね」と笑顔一杯で、ユーモアたっぷりに話されたマイヤー神父様。私はこの時のことを今もはっきりと思い出すことが出来ます。

神父様、なぜ天国に急がれたのですか。私は神父様を想う時、いつでもローマンカラーに黒いスーツを身につけられ毅然とした、柔和なユーモアたっぷりのお優しい姿が目にはやきついていきます。私はいまだに神父様の帰天が信じられないのですが、バラの花の雨をつくって、私を喜ばしてください。



山本邦男(左)、スティーブンス氏(中央)、マイヤー氏(右)、土屋はな子(スティーブンスの前)、武田紀(マイヤーの前)

今は亡きスティーブンス神父様のこと

若い日のスティーブンス神父様がレオナルド邦男と一緒に写った一枚の写真を、思い出一杯の心で眺めています。

神父様、あの時は大変お世話になりました。毎週池田から訪ねて下さり、彼に受洗の恵みを下さいました。わずか22歳の若い命でしたが、喜びと感謝の毎日の中で、神の愛に満たされ、帰天出来たことは、神父様方のお陰様です。スティーブンス神父様はこのレオナルド邦男だけではなく、博愛園に育ちパラグアイ・アルゼンチンに移住していった子供達に、多忙な時間を割いてスペイン語を教して下さいました。今では当時の子供達がそれぞれ独立、結婚し、よい家庭を築き、よい家族に恵まれ、幸せに暮らしております。アルゼンチンのクリスティーナは最近迄神父様の身近にあって、その成長を喜んでいただきましたが、神父様が突然帰天されましたので、彼女達一家はもとより、私達一同大きなショックを受けました。

この写真の中でも、すでにマイヤー神父様、土屋さんも神に召されてしまい、悲痛な思いです。まだまだ存命されて、私達にとって必要な神父様でした。なぜこのように、成る日突然に

天国に行かれてしまったのでしょうか。余りにも早すぎます。四国の各地に取り残されたフィリピンの花嫁達は親を亡くした悲しみに声をあげて泣きました。この世に於けるスティーブンス神父様でなければならぬ使命、お働きが沢山残っております。どうして、こんなにも急いで旅立たれたのでしょうか。来日されてから以来、長い年月お世話いただいた私達は神父様が召されて1年半経った今でも、いまだにこの言葉を繰り返して聞かれています。出来ることならもう一度、私達のところにおいでいただきたいです、スティーブンス神父様。

その他の日本で勤めたことのあるオブレート会士

以前日本準管区(日本・韓国)に勤めたのですが、現在管区から去った神父や修道士もいます。アルバムの中の何処かに写っているジョン・バーレット、デイヴィッド・パートン、リチャード・ボナン、パトリック・ブレイディ、ホゼ・デフロイト、ダニエル・ダッフィ、ロバート・ギル、パトリック・ヒーリ、ロナルド・フランボア、エドワード・ラウニー、ウィリアム・マクロクリン、チャルズ・マクベネット、ジョン・マイヤー、ティモシ・マルヴィー、ニコラス・ネヴィル、

ユーージン・ブレンディヴィル、トマス・ライリー、レオナルド・ロビタイ、津田季徳、レオナルド・スキヤネル、ジェラード・ステープンス、ダニエル・ウォード、デイヴィッド・ウーリックがいます。次のコラージュで他の何処にも写っていない神父方です。ウィルフリッド・デルダー、ロバート・フィツパトリック、ヨゼフ・ホフマンズ、ネステル・ハオ、ロバート・ケレン、ヘンリー・マチモア、ドナルド・オブライアン、シランタ・ベレラ、エドワード・キョチヨ。



オブライエン氏



デルダー氏



フィツパトリック氏



キョチヨ氏(左) ハオ氏(右)



マチモア氏



ベレラ氏



左から右へ クレン氏、ギル氏、
ジョゼフ・フィツジェラルド総長補佐、山崎氏
(後ろに伊丹司祭館)



ホフマンズ氏(左) グァン・ホイドンク氏(右)

その他のオブレート会神学生

オブレート会に誓願を立てて入会したが、しかし司祭叙階までには至らなかった何人かいました。そのうちの二人はこのアルバムのために原稿を寄せられました。林広と

宮本匡士の写真は記事と一緒に載っています。後の6人は次の通りです。リーゼス・バーバー、ジョン・クイン、橋本正士、熊城博、ハーバート・ネルソン、山下春意。

